

猿新聞

獣害防護柵

効果と現状

獣害防護柵とは、耕作地への害獣の侵入を防ぐ目的で構築される柵のことです。

江戸時代。寛政2年（1790）年、瀬戸内海の小豆島では、島全域に120キに及ぶシン垣を完成させたという話が今に伝わっています。シン垣は小豆島に限らず、シカ、イノシシが生息する、本州、四国、九州の各地でごく普通に造られていたもので、土木機器がなかった昔、大変な労力を必要としたと思われる。こうしたシン垣は、明治から戦後の野生動物の乱獲時代には無用な物になり、土に埋められたり、崩れたまま放置されています。

それが、1980年代以降、シカやイノシシ、サルの被害の深刻化が進むにつれ、再び各地で、獣害防護柵と名前を変え造られるようになり、その延長は年々伸び続けています。衝突事故防止のため、国道や高速道路、鉄道



田の中のケモノミチ（矢川で）

でも柵の建設が最近では普通になってきました。防護柵設置には莫大な国費が毎年使われていますが、被害が減少したとの実感は余りないというのが、大方の見方ではないでしょうか。防護柵は、作ってしまえばおわりではなく、維持管理が必要です。だが、中山間地域の衰

退に伴って、その維持管理労働力の確保もままならないのが現状です。集落の周りを囲む集落柵では、地形が機能に大きく影響し、道路や川を遮蔽することは法的、物理的にも出来ず、また、不陸な地形が多く、野生動物の侵入を完全に防ぐことは不可能で、夜毎の出没で田の中に獣道ができていく状況です。

また、集落柵では、隣接する集落との連携した設置が必要ですが、各集落には獣害に対する温度差があり難しいところがあります。防護柵設置にあたっては、野生動物の生態や習性をよく理解したうえで設置することで、大きな効果が得られます。また、維持管理を徹底することで、被害を軽減できるといいうことを再認識する必要があります。

編集・発行者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

また、集落柵では、隣接する集落との連携した設置が必要ですが、各集落には獣害に対する温度差があり難しいところがあります。防護柵設置にあたっては、野生動物の生態や習性をよく理解したうえで設置することで、大きな効果が得られます。また、維持管理を徹底することで、被害を軽減できるといいうことを再認識する必要があります。

サルの位置情報の配信

現在名張市では、市内東部をテリトリーとするA群と、名張市西部と宇陀市の一部を跨いで活動するB群がいます。この2群のサル位置情報を一人の監視員が行なっています。

現在名張市には手がかりなしに近づく必要があり、そのため、現在は受信器の運用者の勘と経験で、おおよその位置を予想し、それを元に電波を受信するために移動するといった、熟練の技術が必要な仕事です。そこでサルの位置情報を正確に受信するには、指向性にすぐれた「八木アンテナ」の導入を提案します。

群れの出没状況や被害状況をモニタリングすることにより、行動パターンが予測でき、効果的な追い払い活動につながる被害を未然に防ぐことができます。尚、データとして活用することで、サルが季節的にどういった所

を利用するのか、また、こういった場所を好むのかなどを想定することができます。これらを踏まえ、名張鳥獣害問題連絡会で、会長 田村の経験をもとに、八木アンテナを使って、現地勉強会を行いました。田村は、受信にあたっては次のものが必要といます。八木アンテナと、自分のいる位置が分かるハンディGPS（スマートフォンで可）や、地図。（地名と、社・寺など目印となるものが入ったもの）

高度な受信方法を話されていました。参加者は、講師の田村さんと、獣害対策指導員の榎原さん、取材をかねての山村でした。今後、名張鳥獣害問題連絡会では、受信機運用者に対する技術研修や、住民への的確な情報提供の改善など幅広く皆様に呼びかけ勉強会を開催する予定です。



宇陀市八木アンテナの使い方勉強会（写真下も）
宇陀市
ワラビ地区で（10月3日）



今年、山栗が豊作！
状況の年次変動をみると、広葉樹の実（種子）の豊凶により出沒時期や回数が変動し、秋期の集落周辺への出沒回数は、山林内の食物量に左右されていると考えられます。



山栗や柿の食痕
ワラビ地区で（10月3日）

「続」ナラ枯れ 鎮守の森の危機！

いま、「ナラ枯れ」という森林被害が全国的に広がり、森林の公益的機能も損なわれかねない深刻な問題となっています。名張市周辺も例にもれず被害が広がっています。

被害が鎮守の森へも及び、先人から受け継いだ文化財的な木が失われる危険にさらされています。ナラ枯れとは、「カシノナガキイムシ」という昆虫が「ナラ菌」という病原菌を木の中に運び込むことによって引き起こされる樹木の伝染病です。

里山が、いまナラ枯れの危機にさらされています。里山は人を含めて生物の生活の場でありエネルギーと物質の循環の原点で、人間が手を入れて作り出した二次的空間です。

そのなかでも鎮守の森は信仰の場所で、昔から親しまれてきた樹木が沢山あります。その木々がいまナラ枯れの危険にさらされています。

里山は、昔から伝統的な農村の暮らしを支えてきましたが、燃料革命以後、人々の生活とは縁遠いものになってしまいました。

そのため、ナラ枯れは林業関係者の間では問題視されていますが、一般の人々の話題にのぼることは少ないです。

ナラ枯れは、葉が赤褐色になり一斉に枯れる樹木の伝染病です。今年の夏は、記録的な猛暑が続き降水量も記録的に少なく、この

落枝や倒木での人や家屋への被害や、送電線や道路・フラへの被害も心配されています。このように、ナラ枯れの影響は、生態系・生活・景観など多岐に及びます。

なかでも、かけがえない神社仏閣の信仰対象木が心配です。

山田 猛著『ドングリ考古学』によると、『イチイガシ』は縄文時代では列島西部で盛んに食べられていたらしい。しかし、三重県内では現存するのは、伊勢神宮の森のほかに、いなべ市と名張市の神社に数本ずつあるのを知っているだけ。という。その希少な『イチイガシ』の古木が、矢川春日神社境内に一本現存しています。「おきつもの名張 今と昔」

高温・小雨が、ナラ枯れを急激な発生を助長したともいわれています。今後地球温暖化などで、このような気象状況が常態化することもあると考えられます。

ナラ枯れによる大量枯死は、森林の公益的機能や地域固有の生態系への影響も懸念されています。また、社寺・公園などの歴史・文化的に重要な樹木の枯死は、地域にとつては大きな問題です。さらに、

矢川春日神社境内のイチイガシ古木



獣肉の食材活用推進

求めることを明記した法律の改正案をまとめました。

農林水産省によりまずと、野生動物による農業被害は、全体の7割がシカ、イノシシ、サルによるものだという。この中で、被害を防ぐための法律が施行された平成20年以降も、被害額は毎年200億円前後で推移しています。このうち、自民・公明両党は被害の減少につなげようと、自民・公明両党は、捕獲した野生動物を食材として活用する取り組みを推進するとともに、その取り組みの支援を国や地方自治体に求めるとしています。

獣肉の歴史

縄文時代の日本は狩猟採集の生活でイノシシやシカを食べていました。また、弥生時代、農耕を始めてからも獣肉食をやめることはなく、それは奈良時代までは当たり前のことでした。仏教伝来に伴い、天武天皇の肉食禁止の詔令以降は、獣肉全般が敬遠されるようになっていきました。だが、日本人の間で全く食べられなくなったということはない。むしろ、食肉化は駄目。そして二本足の鳥類は良く、4本足の獣類は敬遠されるが多かったようです。江戸時代も肉食は続いています。実際には薬と称して、隠れて肉を食べていました。江戸時代シカ肉は紅葉、イノシシ肉は牡丹などと隠語で表わしていました。基本的には奈良時代から明治時代までの約1200年間、肉食は禁止でしたが明治4年、西洋化を進める明治政府は肉食を推奨し、明治天皇が率先して肉食を食べられたともいわれています。

近年、シカやイノシシの捕獲数は、以前と比べると格段に増加し、ジビエという言葉もすっかり定着してきました。が、まだ日本人には、野生動物の肉にはなじみが薄く、駆除されたあと埋めたり焼却処分されているのが現状です。

指導員報告

10月の動向

サルの出没状況

名張A・B群



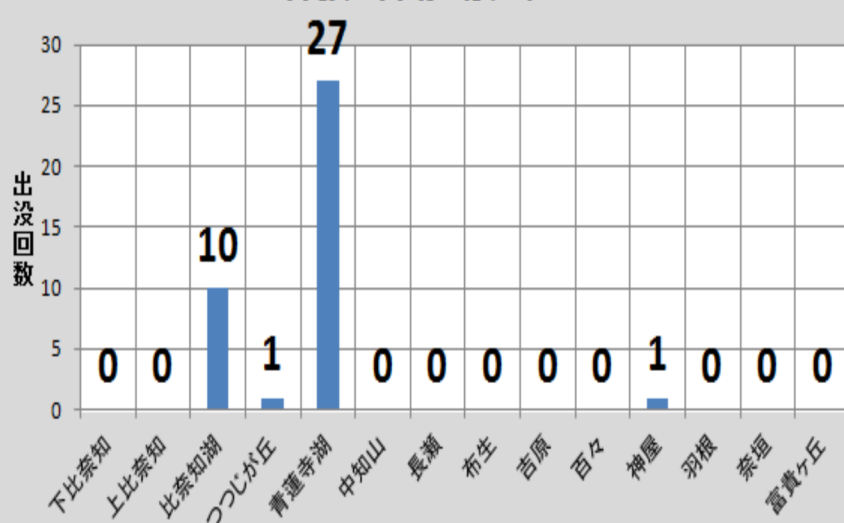
A群は、先月の後半は上比奈知・下比奈知集落で、栗・どんぐり等を採食しているところを何度か目視しています。今月初旬は、比奈知ダムの周辺で中旬は青蓮寺ダムの周辺を遊動し、栗・アケビ等を採食していました。A群には青山群が浸入し、群の個体数が増加しているという情報もあり、現在調査中です。

B群は、先月後半から今月にかけて、ほとんどを室生西谷の各地に滞在し、目視や採食の形跡を何度か確認しています。

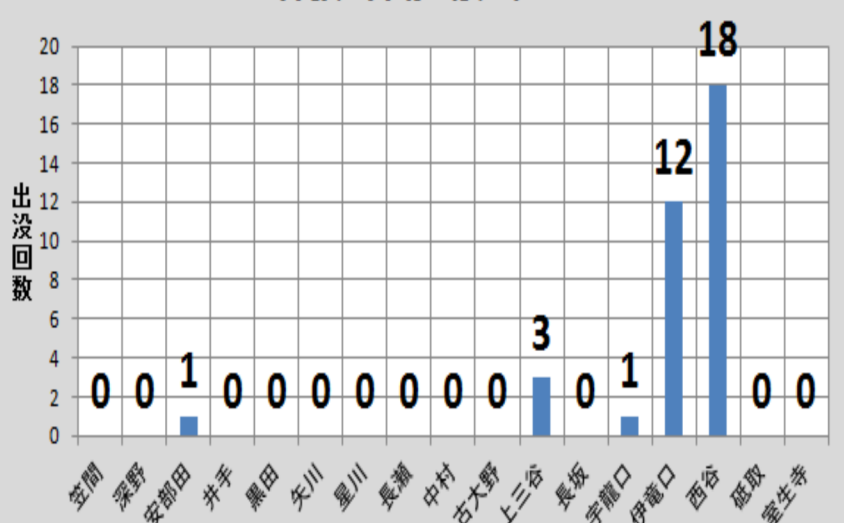
伊賀竜口・赤目滝(長坂)・上三谷方面にも時々出没していますが、住人の情報では、大きな被害には至っていないとのことでした。

今月もまだ、国道165号線の南側を中心に活動しています。だが、ハナレザルが1頭安部田地区(四季が丘)で目撃されています。ハナレザルには、十分にご注意をお願いします。

名張A群移動グラフ



名張B群移動グラフ



- 名張鳥獣害問題連絡会 発行部数
- 錦生地区：100部
- 赤目地区：200部
- 箕輪地区：70部
- ひなち・富貴ヶ丘：150部
- つつじが丘：430部
- 市民センター：120部
- 名張市議会：20部
- 名張市役所：20部